

協 議会と私

大事にしたい ライブラリアンシップ

栗谷正枝
(松下記念病院図書室)

近畿病院図書室協議会が設立15周年を迎え、誠に喜ばしいことと存じます。図書という共通の仕事でお互いに協力しあえることは素晴らしいことだと思います。

私はこの職場に来る前は企業の営業関係に勤めておりましたので、初めはライバルである病院同士が協力しあうということが大変不思議でした。企業では、仕事上のわからないことを他社に聞いて教えてもらうなどということは全く考えられません。だから、私も仕事上のわからないことや悩みを他の病院の人に聞けば教えてもらえるなどということは全く考えもしませんでした。

しかし、図書の仕事に携わってみて初めて、本当に病院間の協力が必要なんだと思うようになりました。文献の相互貸借では協議会発行の総合目録をフル活用し、他病院の協力で文献を入手することができます。普通に考えると、他の病院からの依頼等は断ることもできるはずですが、しかし、協議会に加入してお互いに協力しあっているからこそ、お互いに気兼ねなく、スムーズにこういうことができるのだと思います。そして、このような一つの施設を超えたサービスは、求められる情報を求める人に迅速に提供するという各会員病院担当者のライブラリアンシップに支えられているのだと思いました。

私は今年から幹事になり、研修部を担当しています。私達は図書室をより一層いいものにしていくために、時代に合った知識や技術を身につけていかなければなりません。そのための企画等考えたいと思います。また、研修会は会員同士の交流の場としても大切で、ここで会員同士の意見交換や親睦を深めるなど、よりよい研修会にするため頑張りたいと思います。

幹事の経験

藤本敦子
(国立大阪病院図書室)

私がこの協議会と密接に関わったのは、当院に勤めて2年目のことでした。まだ若くて血気盛んだった私にとっては、病院図書室の立ち遅れはなんとも歯がゆく、何とかしなければと仕事に対する意欲に燃えていた頃でした。

ちょうどその時、幹事の依頼があり、病院図書室の発展にお役に立つならと恐いもの知らずのチャレンジ精神でお引き受けしてしまいました。しかし、初めての幹事会では討議の内容等何一つわからず、私みたいな若輩がこの場所にいるのは何かの間違いではないかと思ったものです。しかし、諸先輩に支えられながら研修部を担当し、幹事会や研修部会、また研修会事業を重ねるにつれ、ようやく幹事としての自覚が出てきて、「研修会」のことばかり考えるようになりました。テーマの設定から開催後のアンケート調査・集計まで全て初体験でしたので、興味と不安とから異常なほどの緊迫感、緊張感がありました。

小規模な病院図書室でありながらも、そこで仕事に従事している方の図書室運営に対する熱意には驚くべきものがあり、図書館の理想ばかりを追い求めていた私は、病院図書室の現実、実態を全く把握していなかったことに気づかされると同時に、今やらなければならないことは毎日の業務をいかによりよくやるか、それをどのように積み重ねていくかであることを学びました。こうした協議会でのさまざまな出来事や出会いには数限りない思い出があるのですが、今思えば仕事に対する方向づけをしてもらったのだと感謝しています。

これからも今までの経験を生かし、少しでも協議会のお手伝いができるよう、そしてより一層経験を積み、後に続く方達に援助ができるよう頑張りたいと思っています。